

## 順治二年（1645）の蘇州（4）

滝野 邦雄

五月二十五日

二十五日、南京 安撫<sup>①</sup>〔として〕鴻臚寺卿<sup>こうかし</sup>の黃家鼎<sup>しゅうせん</sup>・通判<sup>しゅうせん</sup>の周 荃<sup>しゅうせん</sup>・參將の吳某を差來（派遣）す。先ず虎丘に至り、文を〔軍門〕坐營游擊府<sup>おく</sup>に移（同等機関に公文書を送る）り、知會（通知）して迎接させ、蘇府の冊籍を索取す。陳太尊（明の知府の陳師泰）即ち是の夜に於いて避け去る（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十五日」条・二〇五頁）。（二十五日、南京は安撫（混乱を收拾するために設けられた臨時の役職か）として鴻臚寺卿の黃家鼎<sup>こうかし</sup>、通判<sup>しゅうせん</sup>の周 荃<sup>しゅうせん</sup>、參將の吳某を派遣してきた。まず、虎丘に到着すると、城内の游擊府に公文書を送って、知らせて迎えにこさせ、蘇州府の行政文書を押収した。明朝から知府に任命されていた陳師泰は、この夜に逃げ出した）

①『研堂見聞雜錄』に「安撫官の蘇〔州〕に至る有り。一は崇明の黃家鼎<sup>マツ</sup>（鼎）、一は吳郡の周荃なり」と記す所からすると、混乱を收拾するために設けられた臨時の役職かもしれない。もしくは、省内の裁判を掌り一般の政務に参与する安撫使（提刑按察使）のことかもしれない。

②游擊府は、蘇州城内の閭門と胥門の中間の富郎中巷にあった。崇禎『吳縣志』に、

軍門坐營游擊府 傳（富）郎中巷に在り。即ち鹽政の府館なり。萬曆十七年（1589）、〔應天〕巡撫都御史の周繼 題して准<sup>め</sup>され坐營都司を設けて權<sup>かり</sup>に公署と爲す。〔萬曆〕三十年（1602）に至り、〔應天〕巡撫都御史の曹時聘 題して游擊將軍に改む。遂に相い沿りて游擊府と爲す（崇禎『吳縣志』卷之十二・官署・「游擊府」・十五葉）。

とある。もともと、鹽政の府館が、坐營（操練を主る官）都司（大尉に相当）の仮の役所となり、坐營都司を游擊將軍に改めるのにもなって、游擊府となったという。

黃家鼎や周荃などは、まず虎丘に到着して、游擊府に通知して迎えにこさせ、蘇州の行政に関する帳簿を押収する。知府の陳師泰（本稿（3）注4参照）は、この夜に逃げ出す。

逃げ出した知府の陳師泰は、崇禎十二年から蘇州府知府の任にあった。すでに本稿（1）119頁～120頁で検討したように、『蘇城紀變』（一葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）では、「郡守（知府） 狡吏の誑を聽きて倉廩（米藏）を濫發し、以て衙蠹を潤す。而して防守の重事は絶口（口を閉ざす）して談ぜず（知府の陳師泰は、悪賢い胥吏のでたらめを聞いて、米藏を勝手に開き、役所の貪吏を潤してしまった。そして、蘇州防禦の重要事項は、口を閉ざして言い出さなかった）」という。しかし、『吳城日記』や『蘇城紀變』によると、知府の陳師泰は、五月二十二日に、一時騒然とした蘇州城内に告示を出して

人々を安心させている（本稿（3）「五月二十二日」条 105 頁～106 頁参照）。

『蘇城紀變』では、黄家鼎たちが「揚揚（誇らしげに）として張盖（傘をさす）策騎（馬を駆る）して」城内に入り、明朝に任命された高官たちはすべて逃げ出した、と伝える。ただ、黄家鼎たちの蘇州入城は、前日の二十四日に掛けている。

二十四日に至り、忽ち鴻臚〔寺〕少卿の黄家鼎・署通判の周子静（周荃）あり。皆な吳の産にして、率先して新朝に歸順する者なり。〔二人は〕北來の詔令を持ちて吾が蘇を安撫す。諸人 揚揚（誇らしげに）として張盖（傘をかけさせる）策騎（馬を駆る）して、直ちに郡城に入る。上にして都憲（都御史）より下は縣尹（縣令）に至るまで、皆な歛迹（隠れる）避去す（『蘇城紀變』不分卷・一葉～二葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

（二十四日になって、にわかに鴻臚寺少卿の黄家鼎と通判代理の周子静（周荃）が、〔二人は吳の出身で、率先して清政権に帰順したものである〕、清政権の詔令を所持して吾が蘇州を安撫した。これらの人は揚揚（誇らしげに）として張盖策騎（傘をさして馬を駆って）して、ただちに蘇州城内に入った。上は都憲（都御史：巡撫は、都御史の銜（役職）をあてられる）より、下は縣尹（縣令：知縣）に至るまで、皆な隠れて逃げていった）

文秉の『甲乙事案』では、順治二年六月二十六日、安撫の黄家鼎が蘇州に到着すると、明の巡撫の霍達・巡按の周元泰・知府の陳師泰・同知の文王輔・推官の萬適・長洲縣知の李實・吳縣知縣の吳夢白などは、みな逃げ出したといい、黄家鼎たちの蘇州到着を二十六日に掛ける。

〔順治二年六月〕丁未（二十六日）、安撫の黄家鼎 蘇州に至る。〔明の〕巡撫の霍達・知府の陳師泰・同知の文王輔・推官の萬適・長洲縣知の李實・吳縣知縣の吳夢白<sup>など</sup>等皆な逃る（『甲乙事案』卷下・「順治二年六月丁未（二十六日）」条）。

蘇州の高官たちの逃亡については、「五月二十六日」条で検討する。

朱子素の明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』には、黄家鼎の蘇州入城の様子を、「南面して自若たり」であったと伝える。

・・・吳に至りて、〔黄〕家鼎 南面して自若<sup>①</sup>たり。〔周〕荃 獨り微服して市廛に出沒し、郡人 多く之が用を爲す<sup>②</sup>・・・（『明季稗史初編本』卷十三所収『嘉定屠城紀略』・「乙酉五月初九日、南都破、弘光出亡」条）。

①『東塘日割』（荊駝逸史本）は、「至吳郡、〔黄〕家鼎據〔都〕察院、傲岸自若（吳郡に至り、〔黄〕家鼎〔都〕察院に據り、傲岸自若たり）」に作る。『嘉定縣乙酉紀事』（痛史本）は、「〔黄〕家鼎至蘇州、巡撫霍達走太湖（〔黄〕家鼎 蘇州に至り、巡撫の霍達 太湖<sup>に</sup>走ぐ）」とするだけである。

②『東塘日割』（荊駝逸史本）は、「〔周〕荃獨微服出入市廛、郡人多爲之耳目（〔周〕荃 獨り微服して市廛に出入し、郡人 多く之が耳目と爲る）」に作る。『嘉定縣乙酉紀事』（痛史本）は、「〔黄〕家鼎副使周荃、本郡人（〔黄〕家鼎の副使の周荃 本郡の人なり）」とするだけである。

蘇州に到着すると、黄家鼎は統治者然として落ち着いていた。周荃はひとりお忍びで街の店舗

に出入りし、人々は周荃のために働いた、という。

黄家鼐が都察院（蘇州府學の北）に入り、「統治者然として落ち着いていた」と、朱子素は伝えるのである。

『研堂見聞雜錄』も、つぎのように記す。

安撫官の蘇〔州〕に至る有り。一は崇明の黄家鼐（鼐）、一は吳郡の周荃なり。黄〔家鼐〕は例監より鴻臚卿と爲る。〔周〕荃は故と虎邱（丘）の一佻客（世話役のような意味か）にして關説（人のために仲裁する方）を善くし、走聲氣（人となりが温和で人々に好かれた）、宏（弘）光朝に監紀通判と爲る。大兵（清朝の軍）至り、皆な降る。即（ただち）に蘇州安撫と爲る・・・（『研堂見聞雜錄』）。

混乱を収拾する安撫官として蘇州に赴任して来たものがいた。ひとりは、崇明の黄家鼐で、ひとりは、吳の周荃である。黄家鼐は、明朝に時に、例監<sup>1)</sup>（雑途出身：捐納より貢生や監生の地位を購う）から鴻臚卿となった人物である。周荃は、もともと虎丘の佻客（世話役のような意味か）で、善く人のために仲裁をし、走聲氣（人となりが温和で人々に好かれた）。福王政権の時に、監紀通判に任ぜられ、福王政権が崩壊すると、清政権に投降し、すぐに蘇州安撫となった、という。

蘇州を鎮撫するためにやってきた黄家鼐<sup>2)</sup>は、江蘇崇明の人であり、福王政権の時に、例監から鴻臚寺（宮内庁侍従職）序班、ついで鴻臚寺少卿（次官）となる。福王政権の崩壊直後に清政権に投誠する。

『明季南略』の「五月二十日」条に、

〔弘光元年五月辛丑（二十日）〕・・・御史の王懷<sup>3)</sup>・大理寺丞の劉光斗<sup>4)</sup>・鴻臚寺少卿の黄家鼐等 各府に往きて降順冊（帰順者名簿）を取る（『明季南略』卷之四・「五月二十日辛丑」条）。

とあり、『國榷』の「弘光元年（順治二年）五月辛丑（二十日）」条に、

〔弘光元年五月〕辛丑（二十日）、各官の符印を収む。御史の王懷<sup>5)</sup>・大理寺丞の劉光斗・鴻臚寺少卿の黄家鼐等 分道し、招降（投降帰順を勧める）して冊を取る（『國榷』卷一百四・「乙酉弘光元年五月辛丑」条・六二一三頁）。

とあることからすると、五月十五日に豫王が南京に入城し、その五日後の二十日には、黄家鼐は、御史の王懷<sup>6)</sup>や大理寺丞の劉光斗などとともに江南諸都市の投降者受け入れ仕事を命ぜられたようである。

こうして、二十五日に蘇州に到着する。『明季南略』に「各府に往きて降順冊を取る」と記すことや、黄家鼐の副官の周荃が蘇州近郊の太倉や嘉定の帰順受け入れ工作を行なったこと（本稿95頁注5参照）から推測すると、黄家鼐も蘇州に来るまでの短い期間であるが、各都市の投降の受け入れ工作を行っていた可能性がある。

ただし、蘇州到着後、すぐに楊文驄によって殺害される（この事件については「五月二十九

- ✓ 1) 清・雍正元年（一七二三）に上呈された『明史藁』は、例監をつぎのように説明する。

例監は、景泰元年（一四五〇）に始まる。〔それは〕邊事（辺境の事態）の孔棘（甚だ急となる）なるを以て、天下の粟を納む・〔あるいは〕馬を納むる者をして〔國子〕監に入りて讀書せしむ。〔しかしその人数は〕千人を限りて止む。行なうこと四年にして罷む。成化二年（一四六六）、南京 大いに饑え、守臣 建議（提案）して、官員・軍〔戸〕民〔戸〕の子孫をして粟を納めて監に送らしめん（國子監生となるのを認める）と欲す。禮部尚書の姚夔 言う、太學は乃ち育才の地なり、近者 直（北京・南京）・〔各〕省の四十歳〔以上の〕生員及び草を納む・〔あるいは〕馬を納むる者を起送し、動もすれば萬を以て計う、其の溢るるに勝えず。且つ天下をして貨（財産があること）を以て賢と爲さしめ、士風 日々に陋（粗悪）ならんとす、と。帝 以て然りと爲し、爲めに守臣の議を却（却下）す。然れども其の後、或いは歳荒に遇う、或いは邊警に因る、或いは大いに工作を興こすに、率ね往例（前例）を援くとして、之を行なう。訖に止むる能わず（『明史藁』志第五十二・選舉二學校・七葉：『明史』卷六十九・志第四十五・選舉も同じ）。

さらに、『明史藁』によると、援例の監生はあくまでも雑途出身とされ、正途出身と区別される。官職に就くにあたっては、京官では光祿寺・上林苑の属官となったという。ただし、黃家鼎は、鴻臚寺序班になっている。

納粟〔によって入監する資格を得る〕の例を開くに迫れば、則ち流品（秩序）漸く淆る。且つ庶民も亦た生員の例を援き以て〔國子〕監に入るを得。之を「民生」と謂う。亦た之を「俊秀」と謂う。而して監生 益ます輕んぜらる。是に於いて同じく太學に處るも、舉〔監〕・貢〔監〕は府の佐貳〔官〕及び州縣の正官と爲るを得。〔恩蔭の〕官〔生〕・恩生は部・院・府・衛・司・寺の小京職に選せらるるを得。〔これらは〕尚お正途〔出身〕と爲す。而して援例の監生は、僅かに州縣の佐貳及び府の首領官に選せらるるを得。其の京職を授けらるる者は、乃ち光祿寺・上林苑の屬（属官）たるなり。其の遠方に就くを願う者は、則ち雲・貴・廣西及び各邊省の軍衛の有司の首領及び衛學・王府の教授の缺を以て用いらる。而して〔援例の監生は〕終身異途と爲す（『明史藁』志第五十二・選舉二學校・四葉：『明史』卷六十九・志第四十五・選舉も同じ）。

なお、例監（雑途出身：捐納により貢生や監生の地位を購う）は明・景泰元年（一四五〇）に始まったようであるが、福王政権では、順治元年（崇禎十七年）九月十八日の馬士英の提案によって、銀納すれば、童試を免除し、生員の資格を認めるようなことまで行っている。

〔順治元年（崇禎十七年）九月〕十八日、馬士英 府・州・縣の童生（童試の受験生）の應試を免じ、上戸は銀六兩を納め、中戸は銀四兩〔を納め〕、下戸は銀三兩〔を納め〕れば、竟に學院に送りて收考（受験）させんことを請う。時に溧陽知縣の李思謨 童生をして納銀せしめず。〔そのため李思謨は〕特に降五級とさる。李〔思謨〕の降は、乙酉（順治二年（弘光元年）：1645年）正月廿一日の事なり（『明季南略』卷之二・「馬士英請納銀」条）。

①乾隆『鎮江府志』卷之二十五・「宰貳」に「李思謨、字は承伯。〔江西〕浮梁の人。宏（弘）光の時に〔溧陽知州〕に任ぜらる。國變ありて、冠を掛けて去る。襤褸（行李）の外、一の長物（まともな物）無し」。

a：乾隆『鎮江府志』の記述による。ただし、乾隆『鎮江府志』の清の条では「國朝溧陽知縣」とする。

さらに、福王政権では廩生などが銀納すれば官職をあたえることも行ったという。

又た詔もて納貢（生員が捐納を行なって官職をあたえられる）の例を行なう。廩生は銀三百兩を納め、増〔生〕は銀六百兩〔を納め〕、附〔生〕は銀七百兩〔を納め〕めしむ。明年正月十一日に至り、制して廩生 納通判を加う（『明季南略』卷之二・「馬士英請納銀」条）。

- 2) 黃家鼎（字は元中。江蘇崇明の人）は、福王政権の時に、例監（雑途出身：捐納により貢生や監生の地位を購う）から鴻臚寺（宮内庁侍從職）序班（鴻臚寺序班：從九品）、ついで鴻臚寺少卿（次官にあたる：從五品）となる。弘光政権の崩壊直後に清政権に投誠して、蘇州に派遣されるが、すぐに楊文驄によって殺害される。

いまのところ詳しい経歴は、よく分からないが、断片的な資料から考えてみると、つぎようになる。

『研堂見聞雜錄』に、

・・・黃〔家鼎〕は例監（雑途出身：捐納により貢生や監生の地位を購う）より鴻臚卿と爲る・・・（『研堂見聞雜錄』）。

と伝えることからすると、福王政権の時に、例監（捐納により貢生や監生の地位を購う）から鴻臚寺（宮内庁侍從職）序班に就いたようである。

『明季南略』卷之二・「六月甲乙總略」では、

〔順治元年（崇禎十七年）六月〕二十四〔日〕庚辰、……趙之龍 序班（官名。屬鴻臚寺に属する：從九品）の黃家鼎を薦し、少卿（次官）に擢す（『明季南略』卷之二・「六月甲乙總略」）。

とあり、また『甲乙事案』では、

趙之龍 序班（鴻臚寺序班：從九品）の黃家鼎を薦し、少卿（次官）に擢（選抜して任用する）す（『甲乙事案』卷上・「順治元年（崇禎十七年）六月」条）。

とする。忻城伯の趙之龍（本稿（2）注4参照）の推薦によって、鴻臚寺の屬官の序班から鴻臚寺少卿（次官）に選抜して任用されたと理解できる。

なお、徐鼎は『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八一六〕成る）において、「黃家鼎は、趙之龍の私人なり」という。

明の監軍副使の楊文聰 降臣の黃家鼎を蘇州に殺す。

黃家鼎なる者は、趙之龍の私人なり。鴻臚寺序班を以て少卿（次官）に躡升す。我が豫親王 南都に入り、〔黃〕家鼎に命じて安撫使と爲し、檄を捧じて蘇州に至らしむ……（『小腆紀年附考』卷十・「〔五月〕明監軍副使楊文聰殺降臣黃家鼎於蘇州」条）。

徐鼎は、忻城伯の趙之龍に推薦されて鴻臚寺少卿に擢せられた記事によって、このように記したのかもしれない。

『國榷』では、南京鴻臚寺序班から、武官の把總（軍曹に相当する）に転じて、崇禎十七年六月辛巳（二十五日）に、忻城伯の趙之龍の推薦を得て南京鴻臚寺少卿（次官）に進んだと伝える。また、昇進するにあたって、賂（まいない）を用いた。鴻臚寺序班の高夢箕からは抗議がなされたが、認められなかったという。

〔崇禎十七年六月辛巳（二十五日）〕忻城伯の趙之龍 把總の黃家鼎を薦めて南京鴻臚寺少卿（次官）と爲す。〔黃〕家鼎は故の序班にして、之を棄て、武弁に改む。是に至りて賂もて進む。〔鴻臚寺〕序班の高夢箕 掲して之を争うも、聽さず（『國榷』卷一百二・「思宗崇禎十七年六月辛巳（二十五日）」条・六一二五頁）。

①高夢箕は南京に現れた偽太子とかかわりになった人物。拙稿「北來の太子に対する南明政権の対応について」（『經濟理論』第380号）参照。

『國榷』によると、南京鴻臚寺序班となり武官に転じた後、忻城伯の趙之龍の推薦を得て賂（まいない）を用いて鴻臚寺少卿になったというのである。

黃家鼎は、翌年の福王政権の崩壊まで、鴻臚寺少卿（次官）であった。そして、福王政権が崩壊すると、すぐに清政権に投降する。『國榷』の「弘光元年（順治二年）五月辛丑（二十日）」条に、

〔弘光元年五月〕辛丑（二十日）、各官の符印を收む。御史の王懷・大理寺丞の劉光斗・鴻臚寺少卿の黃家鼎等 分道し、招降（婦順させる）して冊（行政文書）を取る（『國榷』卷一百四・「乙酉弘光元年五月辛寅」条・六二一三頁）。

とある。また、『明季南略』の「五月二十日」条にも、

〔弘光元年五月辛丑（二十日）〕……御史の王懷・大理寺丞の劉光斗・鴻臚寺少卿の黃家鼎等 各府に往きて降順冊（婦順者名簿）を取る（『明季南略』卷之四・「五月二十日辛丑」条）。

とあるので、五月十五日に豫王が南京に入城し、その五日後に、黃家鼎は、御史の王懷や大理寺丞の劉光斗などとともに江南諸都市の投降者受け入れ仕事を命ぜられたと推測できる。こうして、五月二十五日に蘇州に到着するが、二十九日に楊文聰によって殺害される。

なお、康熙二十三年刻『重修崇明縣志』卷第十一・人物志・忠義・國朝・六葉～七葉に、

黃家鼎、字は元中なり。順治二年、鴻臚寺卿を以て蘇州を招撫するに、郡邑皆な降る。突として叛臣の楊文聰有り。〔黃家〕鼎を欺き、隻身（ひとり）で密かに兵を伏せ執えて之を殺す。事 上聞され、贈るに其の官の如くし、一子の黃銘德に蔭し、監に送りて書を讀ましむ（康熙二十三年刻『重修崇明縣志』卷第十一・人物志・忠義・國朝・六葉～七葉）。

とある。

さらに、康熙『重修崇明縣志』に、



黄元祿 鴻臚寺序班（康熙二十三年刻『重修崇明縣志』卷第九・選舉志・例監・「黄元祿」条・二十六葉）。とある。この康熙『重修崇明縣志』の「例監」条には、「黄家廩」の記載はないこと、そして明末の例監で、同じ「黄」姓であり、「鴻臚寺序班」の官についてと記すことからするとこの「黄元祿」は、「黄家廩」のことかもしれない。

- 3) 王愷<sup>おうきやう</sup>、河南開州の人。字は仲愛。崇禎丙子（崇禎九年）に副車（郷試の副榜貢生）第一になり、山西の襄垣知縣となる。南明政権では、試監察御史となり、福王政権が瓦解すると、清政権に投誠し淮安などを招撫する。清・世祖「實錄」によると、順治二年七月乙卯（六日）に御史から布政使司參議、蘇松常鎮糧儲道となり（卷之十九・「順治二年七月乙卯（六日）」条）、順治二年十一月六日に河南布政使（卷之二十一・「順治二年十一月甲寅（六日）」条に前任の吳景道が河南巡撫になったとあるのによる）、順治四年十月庚午（三日）に安徽巡撫（順治四年十月三日～順治五年五月十七日在任）となる（卷三十八・「順治五年四月壬午（十七日）」条）。

ところが、

〔順治五年四月壬午（十七日）〕、安徽巡撫<sup>おうきやう</sup>王愷<sup>おうきやう</sup>を降して三級調外用（地方官にする）とす。科臣の魏象樞 其の徇庇受賄（情実によって庇護して、賄賂をもらう）を〔彈〕劾するを以てなり（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽天顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷三十八・「順治五年四月壬午（十七日）」条）。とあり、魏象樞に「徇庇受賄（情実によって庇護して、賄賂をもらう）」と弾劾され、順治五年四月壬午（十七日）に降格処分を受けている（卷三十八・「順治五年四月壬午（十七日）」条）。その後、病にかこつけて辞職して帰郷した（嘉慶『開州志』卷之六・人物・政事・國朝・「王愷」条・三十一葉による）。

嘉慶『開州志』には、つぎのようにいう。

王愷<sup>おうきやう</sup>、字は仲愛なり。性 豪宕（度量が大きく意気盛ん）不羈（才徳が人並はずれている）なり。貢〔生〕を以て太學に入る。崇禎丙子（崇禎九年）、副車第一に中し、〔山西〕襄垣の令を授けらる。邑 豪右（代々の名家）多く、素より治め難し。〔王〕愷<sup>おうきやう</sup> 悉く〔悪事を〕繩すに法を以てすれば、敢て犯す者無し。卓異（最高の勤務評価）を以て徴せらる。會たま闖賊 京師を陷す。〔そこで〕南都に入りて、試監察御史たり。彈劾 直聲有り。國朝 定鼎し、淮安を招撫するの功を以て蘇松常鎮糧儲道を授けらる。開國首運と爲る。僉都御史・巡撫安徽に擢せらるるも、謝病（病にかこつけて辞職する）して歸る。〔王〕愷<sup>おうきやう</sup> 生平 慷慨（意気にあふれる）にして任俠を好み、喜びて人に施與（施し物をする）し、州人 其の徳を食む（食其徳：『易』訟卦に「六三、食舊徳（六三、舊徳に食む：先祖の遺徳でもらった領土に依食すること）」）者 甚だ眾し（嘉慶『開州志』卷之六・人物・政事・國朝・「王愷」条・三十一葉）。

また、乾隆『襄垣縣志』卷之二・職官志・縣令・九葉・「崇正（禎）時」条を見ると、時期は記されていないが末尾に「王愷」が置かれていることから、崇禎年間最後の襄垣知縣であったと推測できる。そして、その「王愷」条の割注に、

直隸開州の選貢なり。嚴明（嚴肅で公正）果斷（斷固としている）なり。豪強は歛跡（勝手なことをしなくなる）し、盜賊は破膽（恐れおののく）たり。城の三壁を修めるに俱に磚甃（煉瓦造り）を以てす。兆民 之に頼る。官は安徽巡撫に至る（乾隆『襄垣縣志』卷之二・職官志・縣令・「崇正（禎）時」・「王愷」条・九葉）。

とある。

魏象樞の弾劾文は、『寒松堂全集』に収められている。それはつぎのようなものである。

臣（魏象樞） 惟うに朝廷の用人（人材の任用） 節鉞より重きは莫し。而して撫臣（巡撫）の盡職（職務に精励する）は、首に封疆（委任された地域）を事とす。封疆の係る所は撫臣（巡撫）と羣吏と之を共にすると雖も、而れども清正（公明正大）に屬（屬官）を率い、嚴肅に持法（法を行なう）えば、則ち専ら之（すべての責任）を撫臣（巡撫）に責（要求）めるなり。安徽巡撫の若きは、蓋し一日も地方に容るる可からざるの者なり。〔王〕愷<sup>おうきやう</sup>は本より庸流（凡庸で節操がない）にして謬りて重任（安徽巡撫）を承く。負債（借金）萬餘ありて、〔赴任先の〕地方より取償（埋め合わせる）するは、内外の諸臣 共に聞き共に知るなり。豈に以て聖朝 培植（大事に育て上げた）するの疆土（領土）を以て、不肖なる者の償債（負債の返済）の需（もと）めに供す可けんや。臣 涙の喉に在る有りて、方に入りて告（告訴）を期するに、適たま垣中（官署）に辦事するに因り、江南督臣（總督）の馬國柱の「疏祭縣官逆跡已著（疏もて縣官の逆跡（不行跡）を祭（参）し已に著らかなり）」等の事の内に稱すらく、東流知縣の鄧繼

球 文を偽りて賊を迎えるの不忠不義の業あり<sup>①</sup>、と。奉けたる嚴綸（降された皇帝の旨）もて置くに重典（重罪）を以てす。抑そも我が皇上の除奸誅逆（反逆者を除き誅する）の法は、甚だ斷（断固として）なり。臣（魏象樞）全疏中より〔王〕懐の全咨（すべての平行文）を読むに、其の〔鄧〕繼球を曲庇（道理をまげてかばう）するの語を見る。言の悖謬（でたらめ）なること大いに駭異（驚異）す可し。〔鄧〕繼球〔王〕懐の爲に吏に家を移して城〔内〕より出すを屬（依頼）するは、〔王〕懐の明知する所なり。且つ庫貯（倉庫の物品）・蘆課等銀九百餘兩を搜回すれば、逆跡（不行跡）顯然たり。誰か敢えて之を諱まんや。〔王〕懐既に特疏の題叅（がえん）を肯ぜず。又た〔鄧〕繼球を照舊（そのまま）に任事（仕事させる）せしむ、是れ何れの心を爲すや。〔王〕懐に據れば云う、舍短取長（いいところだけを取る）、と。臣（魏象樞）賊に通じ庫を盗むの官を知らず。更に何の長ずること有りて、〔王〕懐は乃ち亟亟（慌ただしく）と之を取らんや。尤も異とす可き者は、〔鄧〕繼球銀三千金を獻ずるに、未だ呈允（上申して許しを請う）を経ず、突として撫衙に解れり。明らかに是れ〔王〕懐の貪婪（貪欲を極める）を窺（感づく）するも、敢て助餉（軍用費の献金）の名に借りて、以て暮夜（ひそかな）の賄を通ず。天日上に在り、將に誰を欺かんや。設し〔王〕懐心に四知（清廉で賄賂を受け付けぬ）：『後漢書』楊震傳に基づく）を畏れば、即ち當に督按に移會（平行文を用いて掛け合う）し、厳しく〔鄧〕繼球への提究（追究）を加うべし。〔なのに〕何ぞ督臣の咨の〔王〕懐に到る有るを俟たん。〔王〕懐始めて三千金の獻を説き出し、又た巧みに一貯庫を立つるの名あり。其の中の〔鄧〕繼球を誇許（誇張して称赞）するに至るに、一に則ち「頗る能聲有り」と曰い、再び則ち「吏才頗る稱さる」と曰う。不軌（反逆）を蓄謀（抱き続ける）し、禍心を包藏（ほうざう）の事を將（い）ては、始終一言も道わず。〔王〕懐自から其の非を掩わんと欲し、〔鄧〕繼球の飾罪（罪状を飾り立てる）を爲さざるを得ざるのみ。況んや撫臣の責（責務）は封疆に在り、此の逆賊未だ剪さざる際に當りて、正に宜しく州縣を嚴飭（厳しく監督）し、效死（命をおし）固守すべし。〔しかし〕、〔王〕懐の云う所の「家眷（家族）行なう可し」等の語の如きは、是れ下を率え、以て身家（本人と家族）を瓦全（目先の安定を求める）の路なり。而して自から地方を失陷（委任された地域を攻略される）さるの咎を免る、獨り何れの地に封疆されるかを思わず、賊の至りて逃げ・賊の去れば返るを以てする可けんや。此れ心を舉事（叛乱）に存し、目に國法無きに似たり。臣（魏象樞）徽池の諸々の郡縣、聞風して「尤（とがめ）に效い」（『左傳』莊公二十一年）、必ず遇警する者は異心有り、行賄する者は故物（舊物）を得るに至り、封疆に貽禍（禍をおくる）あるを恐る。眞に畏る可きなり。國家抑そも何の利ありて此の撫臣有らんや。伏して祈るに部敕して確議し、如果し臣（魏象樞）の言の謬たざれば、〔王〕懐を重治（処分）するに「藐（輕視）法悞國（法を藐（輕視）し、國を悞る）」の罪を以てせん。庶は封疆幸有りて、貪劣徹を知るを。謹しみて題して旨を請う、と（『寒松堂全集』卷之一・「摘參劣撫狗（徇）縱順賊縣官等事疏」・三葉～五葉）。

①〔五年戊子夏四月〕癸巳（二十八日）……江南東流縣知縣の鄧繼球 餉を盗む賊を迎うを以て棄市さる（『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之三十八・「五年四月癸巳（二十八日）」条）。王懐は、江南東流縣知縣の鄧繼球の不法行為を、賄賂をもらい必要以上に擁護したことを弾劾される。

この結果、「奉けたる聖旨に、該部 嚴察して議奏（検討して意見をまとめ上奏する）せよ」（『寒松堂全集』卷之一・「摘參劣撫狗（徇）縱順賊縣官等事疏」・五葉）となる。

- 4) 毛際可（字は會侯、号は鶴觴。浙江遂安の人。明・崇禎六年（一六三三）～清・康熙四十七年（一七〇八）。順治十五年戊戌科（一六五八）二甲七十八名の進士）は、「劉公光斗墓表」でつぎのようにいう。

公諱は光斗、字は暉吉、初字は、其の別號なり。世々常州武進の人爲り。公少きより敏慧にして文章を能くす。弱冠にして庠に饗られ、甲子（天啓四年：一六二四）に鄉試に擧げられ、乙丑（天啓五年：一六二五）に進士の第に登る。紹興府推官を授けらる。浙閩を分校す。廣西道御史に内擢され、長蘆鹽政を視る。未だ任ぜられざるに、外艱（父の喪）に丁る。服除し、巡視中城〔御史〕及び巡視屯田〔御史〕、督保河餉、内艱（母の喪）を以て里に歸る。辛巳（崇禎十四年：一六四一）の内計に、仇者の構（誣告）に中る。乙酉（弘光元年（順治二年）：一六四五）、南中（南方：福王政權）の薦ありて、河南道御史に補せられ、尋いで大理寺右丞に陞る。本朝に入り、大理寺丞を以て常州を安撫す。經略の洪公承疇江南に駐し、江南建設三部を議す<sup>①</sup>。首に公及び祁公逢吉・梁公雲樞（構）を推す。又た忌む者の抑える所と爲り、行人司司正に左遷さる。江西に頒詔し、復た福・興・漳・泉の四府に頒詔す。逾年にして工部屯田司郎中に陞る。壬辰（順治九年：一六五二）、廣西の試を典するに、江西南昌の行館に卒す（『安

日」条で述べる)。

周荃<sup>5)</sup>は、蘇州長洲の虎丘に住んでいた。福王政権の時に、蕪湖船政通判(『研堂見聞雜錄』では「監紀通判」とする)となる。福王政権が崩壊すると、蘇州の安撫を命ぜられた黄家鼎の副官として蘇州に行く。途中、蘇州近郊の太倉府と嘉定縣の投降処理を担当して、黄家鼎とともに蘇州に到着する。黄家鼎が殺害された時には、あやうく難を逃れる。その後に軍を率いて蘇州に駐留した李延齡(李率泰:漢軍正藍旗人。李永芳の次子。字は叔達。「延齡」は、初名である)や巡撫の土國寶のもとで、蘇州の民生の安定に努力する。そして、順治五年から順治七年まで開封知府となり、順治五年九月二十五日に、開封府知府から湖廣按察使司副使となつて、布政使司參議・分守荊西道を兼ねる。順治九年三月十一日に、山東按察使司副使となる。後に、辭職して、故郷で過ごす。

參將の呉某については、いまのところよくわからない。

序堂文鈔』卷二十三・「劉公光斗墓表」・一葉～三葉)。

①『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之二十一・「順治二年十一月乙亥(二十七日)」条に、洪承疇が上疏して「皆堪大用」とした人物のなかに「祁逢吉」・「梁雲構(構)」などとともに、「劉光斗」も言及される。

②『國朝貢舉考略』(卷一・六葉:嘉慶八年序)によれば、劉光斗は順治八年辛卯科廣西鄉試の考官となっている。

③『四庫全書存目叢書』集部第229冊所収の『安序堂文鈔』(康熙間刻增修本)は二十卷本であり、この「劉公光斗墓表」は収められていない。この墓表は、三十卷本『安序堂文鈔』(康熙己巳(康熙二十八年:一六八九)原刻本)に、収められている。

劉光斗、字は暉吉、号は初韋、江蘇常州武進の人である。天啟五年乙丑科(一六二五)三甲十二名で進士となり、紹興府推官に任命される。廣西道御史・巡視中城御史・巡視屯田御史となるが、誣告されて逼塞する。福王政権下で、河南道御史、ついで大理寺右丞となる。福王政権が崩壊して、清政権に帰順し、大理寺丞の肩書で常州の接収工作を行なった。洪承疇に推薦されるが、昇進がはかばかしくなく、ようやく工部屯田司郎中になる。そして、廣西の郷試の考官として派遣されるが、江西南昌の公館で亡くなった、という。

乾隆『武進縣志』には、つぎのようにいう。

〔劉光斗〕字は、暉吉、明・乙丑の進士なり(天啟五年乙丑科(一六二五)三甲十二名の進士)。紹興に司李(推官)たり。冤獄を雪ぐこと多し。時に海寇の劉香海上に横〔行〕す。浙撫其の能を知り、監軍(監督する軍隊)を屬ねて之を討ちて平らげしむ。攝會稽〔縣〕・諸暨〔縣〕兩邑の□海潮岸を壊す。〔そこで〕、石塘を築き、岸を圩(かこむ)し之を衛る。里人祠を立てて祀る。御史に擢せられ、彈劾するに權貴を避けず。大兵南下し、豫王人を擇びて安撫さすに、〔劉〕光斗人望の歸する所なるを以て、常州を安撫するを命ず。民皆な安輯(安定)す。時に蘇州を撫する者に人を得ず、幾んど變を致さんとす。〔そのため劉〕光斗に頼りて調護(調整保護)し全きを得。〔順治二年・十一月乙亥(二十七日)に〕經略の洪承疇疏もて大用(重用)す可しと薦む。秉銓を格し、行人に左遷さる。詔を聞中に頌す。直指(巡按御史)某(周世科)性剛暴なり。薦紳(縉紳)・士民毎に以て大戮に陷いるに疑似(近い)す。〔劉〕光斗反覆(しらべる)開諭(勸告)し、救免する所多し。壬辰(順治八年)、廣西に典試するに、疾を道に得て卒す。邑人仁賢を建てんことを請い、之を祠祀す(乾隆『武進縣志』卷之九・人物・宦績・國朝・「劉光斗」条・六十二葉:光緒『武進陽湖縣志』(卷二十二・人物・宦績・國朝・一葉)もほぼ同じ)。

①光緒『諸暨縣志』卷十八・災異志・八葉に「〔崇禎〕十五年壬午、江潮楓溪に至る」とある。

ここで、蘇州を平和裏に接収できたのは、劉光斗のおかげであると記すが、劉光斗が蘇州接収に係わったことがあったのかわからない。



- ✓ 5) 周荃は、福王政権の時に、監紀通判に任ぜられ、福王政権崩壊直後に清政権に投誠したということからか、あまり記録がなく、いまのところ詳しい経歴は、分からない。断片的な資料から考えてみると、つぎのようになる。

『研堂見聞雜錄』に、つぎのようにいう。

安撫官の蘇〔州〕に至る有り。一は崇明の黃家廩（廩）、一は吳郡の周荃なり。黃〔家廩〕は例監（雜途出身：捐納より貢生や監生の地位を購う）より鴻臚卿と爲る。〔周〕荃は故と虎邱（丘）の一佻客（世話役のような意味か）にして關說（人のために仲裁する）を善くし、走聲氣（人となりが温和で人々に好かれた）、宏（弘）光朝に監紀通判と爲る。大兵（清朝の軍）至り、皆な降る。即（ただち）に蘇州安撫と爲る・・・（『研堂見聞雜錄』）。

安撫官として蘇州に赴任して来たものがいた。ひとは、崇明の黃家廩で、ひとは、吳の周荃である。黃家廩は、明朝に時に、例監（雜途出身：捐納より貢生や監生の地位を購う）から鴻臚卿となった人物である。周荃は、もともと虎丘の佻客（世話役のような意味か）で、善く人のために仲裁をし、走聲氣（人となりが温和で人々に好かれた）。福王政権の時に、監紀通判に任ぜられ、福王政権が崩壊すると、投降し、すぐに蘇州安撫となった、という。

周荃は、虎丘の人で、土地の世話役のようなことを行ない、人の仲裁をし、人柄がよく友人が多かった人物であったようだ。

周荃は、蘇州にやってくる前、江蘇の太倉、嘉定、崑山などの接収工作を行なっている。嘉慶『直隸太倉州志』は、『吳氏私志』を引用してつぎのようにいう。

又た『吳氏私志』に云う、順治乙酉六月十三〔日〕、周荃 奉けたる命もて太倉を安撫す。〔周〕荃は郡人にして虎邱に居り、原任の蕪湖船政通判（正六品）なり。州に至り堂に坐し、百姓に諭す。民は皆な香燭（蠟燭を供える）・結綵（飾り立てる）し門に「順民」の字を書す。〔周荃は〕繼ぎて嘉定に往き、復た來り任じ、十九日に至りて去る・・・按ずるに〔周〕荃、名は靜香なり。其れ諸屬を按撫（安撫）するに、興朝（新興の王朝）に於いて固より功有り、而して民生を綏靖（安撫平定）するに亦た徳有りて事定まる。巡撫の土國寶 疏もて「一は死し・一は生くるも均しく命を辱めず」事の爲にす〔ということ〕を請い、「死するは崇明の黃家廩 楊文驄を招くを以て殺さる」と謂い、「生くるは則ち〔周〕荃なり」とす。即ち開封知府に任ぜられ、青州副使に陞る。罷め歸りて林間を徜徉（行き來する）す。心を禪學に究め、法を宏（弘）覺國師に得（嘉慶『直隸太倉州志』卷六十・雜綴三・太倉州・十一葉）。

順治二年六月十三日に、周荃は命ぜられて太倉を安撫した。周荃は蘇州の人で虎丘に住み、もとの蕪湖船政通判であった。太倉州に到着して役所に坐して、人々に訓示した。人々は蠟燭を供えて飾り立てて、門に「順民」の文字を書いた。周荃は続いて嘉定に行き、また帰ってきて仕事をして、十九日に出発した。案ずるに、周荃の名は靜香である。諸々の屬（蘇州の諸縣）を安撫（安定）させるのに、清政権にもとより功績があった。そして人々の生計を落ち着かせるのにもまた、人徳があったため事がうまく定めることができた。蘇州を接収しに行き、楊文驄のために黃家廩が殺害されると、巡撫の土國寶が「一は死し・一は生くるも均しく命を辱めず（ひとは亡くなり、ひとは逃れることができたが、ふたりとともに君命を辱めませんでした）」という件の上疏文で、「亡くなったのは蘇州崇明出身の黃家廩であり、楊文驄を投降させようとして殺されました」といい、「生き残ったのは、周荃です」と上奏した。そして、周荃は開封府知府に任ぜられ、青州副使（山東按察使司副使）に昇進した。辞職してからは、山林を徘徊し、禪宗を究めて、弘覺國師に教えをうけた、という。

周荃が嘉定縣に行ったときの様子を、朱子素の明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』（『嘉定縣乙酉紀事』（痛史本）は、「十四日、北安撫周荃至縣、取邑篆冊籍而去」とあるのみ・『東塘日割』（荊駝逸史本）は「競用黃紙書大清順民四字、揭於門」無し）は、つぎのように伝える。

〔順治二年六月〕十四日、安撫の周荃 單騎もて邑（嘉定縣）に至る。邑中の縉紳 皆な出で避く。百姓 路に結綵（飾り立てる）し、〔嘉定縣〕城を出でて之を迎う。競いて黃紙を用いて「大清順民」四字を書き、門に掲げる。旋いで邑篆（嘉定縣の官印）并せて冊籍（帳簿）を藏じて郡に上つる（明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』）。

順治二年六月十四日、安撫の周荃は、單騎で嘉定縣城にやってきた。城内の郷紳は、みな出て避難した。人々は道路を飾りたて、城外に出て周荃を迎えた。そして競い合って、黃紙に「大清順民」四字を書いて門に掲

げた。そして、嘉定縣の官印に帳簿をあわせて閉じて役所にたてまつった、という。

なお、朱子素の明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』に、順治二年六月二十七日、吳志葵が兵を繰り出してきたので、嘉定城内外の人たちは、明朝恢復の軍勢だと思い、綵を掛けて飾り香を執って迎えた。その人数は、周荃を迎えた時の十倍であった、という。

〔順治二年六月〕二十七日、〔吳〕志葵 兵を發して來る。城の内外の百姓 謂（『東塘日割』（荊駝逸史本）「疑」に作る）いて〔明朝〕恢復の師と爲し、綵を懸け香を執る。周荃を迎える時に較べるに十倍なり（明季稗史初編本『嘉定屠城紀略』：『嘉定縣乙酉紀事』（痛史本）は、この個所を「二十七日戊寅、吳志葵率兵入城、旋去入海。百姓聞〔吳〕志葵至、執香以迎」に作る）。

後の記録であるが、道光『崑新兩縣志』によれば、周荃は六月十二日に崑山を安撫するために派遣され、あわせて倉庫も調査したとある。

〔大清順治二年乙酉六月〕十二日、院 郡人の周荃を遣りて崑〔山〕に來らせ安撫し、并せて倉庫を察監さす（道光『崑新兩縣志』卷三十九・紀兵・二十一葉）。

こうして、六月二十五日に黃家廩とともに蘇州に到着する。ただし、二十九日に黃家廩が、楊文驄によって殺害されるという事件が起こる。周荃は、危うく難を逃れ、蘇州の危機を救おうとする。また、周荃は閏六月の時には蘇州の人々を救おうとした（拙稿「蘇州における李延齡の伝説について」（『経済理論』第376号）参照）。

その後、周荃は、開封府知府に任ぜられる。康熙（同治二年重修康熙三十四年刻本）『開封府志』卷之二十・職官・二十一葉によれば、「周荃蘇州人。〔順治〕五年任」とある。前任知府の蕭芳（廣東萬州人。順治四年着任）の後をうけて、順治五年に着任し、順治七年まで知府を勤めていたようである（康熙『開封府志』に、後任の遼東人の丁時陞が順治七年に着任と記されていることによる）。

ただ、乾隆重修『世祖實錄』によると、順治五年九月二十五日に、開封府知府から湖廣按察使司副使兼布政使司參議・分守荊西道となっている。

河南開封府知府の周荃 湖廣按察使司副使と爲し、布政使司參議・分守荊西道を兼ねしむ（乾隆重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之四十・順治五年九月丙戌（二十五日）条）。

順治九年三月十一日には、山東按察使司副使となる。

湖廣荊西道副使の周荃 山東按察使司副使と爲す（乾隆重修『大清世祖體天隆運定統建極英睿欽文顯武大德弘功至仁純孝章皇帝實錄』卷之六十三・順治九年三月壬午（十一日）条）。

この後、周荃は辞職して蘇州に帰ってきたようである。民國『吳縣志』には、つぎのようにいう。

周荃、字は靜香、花溪老人と號す。長洲の人なり。官は青州道（山東按察使司副使）に至る。罷政（免職）されて歸る、長齋（ずっと素食する）して戸を閉し、罕に人と接す。書法 氣韻（風格）多く、山水を善くす。倪・董を師とし、筆趣（筆致） 超妙（巧みですばらしい）たり。古人の爲に束縛されず、兼ねて花卉に工なり。曾て錢中諧（字は官聲。江蘇吳縣の人。清・順治十五年戊戌科（一六五八）三甲三名の進士／康熙十八年己未科博學鴻詞（一六七九）の第一等十四名）の爲に「長橋煙雨圖」を畫き、王士禎（王士禎：字は貽上、号は阮亭、自ら漁洋山人と号した。山東新城の人。明・崇禎七年（一六三四）～清・康熙五十年（一七一））。清・順治十五年戊戌科（一六五八）二甲三十六名の進士） 題長歌一首を爲す。著に『聞香池上集』有り『圖繪寶鑑』・『清朝書畫家筆錄』合纂（民國『吳縣志』卷第七十五下・列傳・藝術二・長洲縣・清・〔周荃〕）。

①王士禎の『帶經堂集』（卷二十一・漁洋詩二十一戊申（康熙七年）稿・四葉～五葉）に「六月十二日喜雨晨起爲錢宮聲題周靜香長橋（橋）煙雨圖（六月十二日、喜雨、晨に起き錢宮聲（錢中諧）の為に周靜香（周荃）の「長橋（橋）煙雨圖」に題す）」が収められている。

②『圖繪寶鑑』に「周荃、字は靜香、姑蘇の人。長洲の人なり。青州道（山東按察使司副使）に官たり。山水は揮・向を法とす〔割注：尤も墨點花葉〕」（『圖繪寶鑑』卷第七・皇清・〔周荃〕条・八葉：『圖繪寶鑑』の「卷第七・清」の部分は、錢塘の藍瑛（田叔）・武林の謝彬（文侯）纂輯）。

③宣統三年自序『清朝書畫家筆錄』（上海進化書局印）に、「周荃、字は靜香、花溪老人と號す。長洲の人なり。官は觀察使青州（山東按察使司副使）に至る。罷政（職務を解く）され歸る、長齋（一年中なまぐさものを食べない）して戸を閉し、罕に人と接す。書法 氣韻（風格）多く、題句も亦た有致（趣きに富む）。山水を善くす。倪・董を

なお、江南諸都市の投降工作を行っていた劉光斗が、無錫に到着した時の様子を『明季南略』巻之四・「[弘光元年（順治二年）五月]二十七日」条の附記の「無錫日記」は、つぎのように伝える。

『無錫日記』に「[以下のように] 云う。五月廿七[日]、劉光斗 無錫に至りて冊（帳簿）を討（請求）す。舟 西門橋に泊す。[劉] 光斗は、武進の人、天啟乙丑の進士（天啟五年乙丑科（一六二五）三甲十二名の進士）なり。崇禎朝に河南道御史と爲り、貪に因りて黜罰（處罰）さる。清 南京に入り、遂に清の官と爲り、常[州]・鎮[江]の士民を安撫し、州縣の戸口（人口調査）・糧役冊を討（請求）す。旗蓋（儀仗兵の用いる旗と傘）炫煌（耀く）たり。邑中の郷紳 之を拜せんとする者は市の如し。望亭の巡檢（警察・治安維持の武官） 來り見えるに、[劉] 光斗 曰く、汝は好し、該<sup>まき</sup>に一級<sup>のぼ</sup>を陞<sup>のぼ</sup>らすべし、と。即ち主簿（知縣の錢糧・戸籍の業務を補助する）に陞<sup>のぼ</sup>らせ、縣印<sup>つかさど</sup>を掌らしむ。糧<sup>も</sup>缸<sup>も</sup>を將<sup>も</sup>て俱に常州に提（引率）<sup>ゆ</sup>し去く。先ず示（告示）有りて、安撫の劉[光斗]「該縣は速やかに缸隻（船舶）を備えよ。士民は必ずしも驚惶（驚き慌てる）せず」と批し、常州道の張健「本道 令箭（號令）一枝を發す、抑々無錫の百姓 各々生理を安んぜよ。大兵の到る處、秋毫も犯す無し」と批す、と云う（『明季南略』巻之四・「[弘光元年（順治二年）五月]二十七日戊申」条の附記）。

五月二十七日に劉光斗は、無錫に到着し、帳簿（行政文書）を提出させた。劉光斗の乗った舟は、西門橋に停泊した。劉光斗は、江蘇武進の人で、天啟五年乙丑科（一六二五）三甲十二名の進士である。崇禎年間に河南道御史となったものの、貪・酷で処分された経歴の人物であった。清政權の軍が南京に入城すると、とうとう清政權の官員となり、常州・鎮江の人々を安んじて慰撫し、州縣の人口や徭役の割り当て帳簿を提出させた。旗蓋（儀仗兵の用いる旗と傘）は輝いていた。無錫の郷紳が劉光斗に拝謁しようとして市場のようにごった返した。望亭の巡檢（警察・治安維持の武官）が目通りしたところ、劉光斗は「お前は、いいやつだ。一段階昇進させよう」といい、主簿（知縣の錢糧・戸籍の業務を補助する）に昇進させ、縣印を管理するようにさせた。そして、共に糧秣を運送する船を常州に引率して行った。その出発前に告示があり、そのなかで劉光斗が「当該縣はすみやかに船舶を準備せよ。ただし、驚き慌てることはない」と述べ、張健が「本官は命令を出す。無錫のもの達は、それぞれ落ち着いて生活せよ。清朝の軍の通る所、少しもほんのわずかでも人々のものは犯さない(軍規がよく守られている)」と述べたという。

師とし、筆趣（筆致） 超妙（巧みですばらしい）たり。古人の爲に束縛されざる者なり。兼ねて花卉に工なり。姿態 頗る佳し」（『清朝書畫家筆錄』巻一・二十七葉）。

五月二十六日

二十六日、本府の弁（武官）等 儀從（儀衛）を備え、香を執りて迎接す。安撫（黃家鼎）府堂に入りて坐し、告示もて府前に張挂（広げて掛ける）す〔その告示は〕、「大清順治二年、奉<sup>う</sup>けたる欽命定國大將軍豫王の令旨」と稱す。大意に謂う、順從する者は秋毫も犯さず、抗逆する者は揚淮（揚州）もて例と爲す、と。錢牧齋 另に印記有るの告示もて、招諭（天子の命で帰順を勧める）慰安（安心させる）す。〔眉批：錢牧齋 另に印記有るの告示もて招安するは、他書の未だ載せざる所なり。此の翁も亦た出力して效忠（忠誠をつくす）を爲す可し〕是の晩、長洲縣知縣の李<sup>ママ</sup>碩（李實）も亦た官を棄てて去る。撫・按<sup>訂正</sup>は仍<sup>かえ</sup>お回<sup>り</sup>て虎丘に寓す（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十六日」条・二〇五頁～二〇六頁）。

（二十六日、蘇州の武官などは、儀衛兵を準備して、香を執って迎えた。黃家鼎は、蘇州府署（蘇州府署：今の道前街にあった）に坐して、告示を広げて掛けさせた。その告示は「大清順治二年、奉けたる欽命定國大將軍豫王の令旨」とするもので、その大意に「従う者は、少しも犯さない。反抗する者は、揚州を例とする」とあった。また、錢謙益の判を押した別の告示で、天子の命で帰順を勧め安心させた。この夜、長洲縣知縣の李實は官職を棄てて去った。安撫の黃家鼎は、虎丘に戻って行った）

黃家鼎が掛けさせた告示は、「秋毫も犯す無し」や「揚淮（揚州）を鑒とせよ」という意味の文言があるとするので、本稿（3）p111～p112で検討したものであろう。「錢謙益の判を押した別の告示」は、『甲乙事案』で、「錢謙益 既に清に投誠し、江南を招降するを以て己が任と爲す。書を督撫及び郷紳の輩に致し降るを勧む。〔その書には〕、「名正言順、天與人歸」等の語有り」（『甲乙事案』卷下・「順治二年六月丁未（二十六日）」条）とあるので、『甲乙事案』や『織言』に引用される告示ではないかと思う。また、徐鼎も『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成）にこの告示を引用し、最後に、

相い傳うるに以て錢謙益の筆なり（『小腆紀年附考』卷十・「〔順治二年五月丙午（二十五日）〕降臣趙之龍・錢謙益爲我大清傳檄四方，諭令降順」条）。

と記し、この告示は、錢謙益の書いたものであると伝えられてきた、という。

ただ、この告示の最後には、「南京の文武諸臣の趙之龍・朱國弼・劉良佐・王鐸・蔡奕琛・錢謙益・梁雲構・李喬・朱之臣・李沾・唐世濟・鄒之麟など謹<sup>もう</sup>しみて白す」とあり、錢謙益以外の帰順した高官の名前が並んでいる。また、『甲乙事案』で「名正言順、天與人歸等の語有り」というが、『甲乙事案』などに引用される告示では、「助信佐順、天與人歸」となっている。

しかしながら、『吳城日記』で「錢謙益の判を押した別の告示」というのは、この『織言』で引用される告示を指していると考えてもいいかと思う。では、この告示はどのようなものであるのだろうか。

『織言』引用の告示の最初に、この告示が出された理由をつぎのように述べる。

五月十三日、清兵 南都に入るも、未だ洪武門を開かず。諸大臣 倡義（抵抗運動を起こす）梗命（逆らう）する者有るを慮り、大書して通衢（大きな道路）に曉諭（告知）し、并せて刊刻して遠近に宣播（布告）す（陸圻『織言』下・「南京諭衆」条〔『古學彙刊本』所収本による〕）。

五月十三日に清政権の軍が南京に進駐したが、まだ洪武門は開門しなかった。福王政権の諸大臣が決起して反乱を起こすのを心配したため、大通りに大きく告知を出し、さらに印刷して遠近に布告した、というのである。

『甲乙事案』では、

時に百官 既に清に投誠す。復た檄を省・直（南直隸）に傳え、諭令（布告を出して命令する）して降順せしむ（『甲乙事案』巻下・「乙巳（二十四日）、劉良佐以帝至南京」条附録）。と記す。各地に降順するように命じた布告であるとする。

『甲乙事案』に引かれる「告示」は、つぎのようなものである。

遼・金・元より以來、朔漠（北方の沙漠地帯）より入りて中國に主たる者は、有道を以て無道を伐つ<sup>①</sup>と雖も、好<sup>よし</sup>を棄て、構隙（仇同士になる）し、問罪（罪を問う）して稱兵（舉兵）せざるは靡し。〔清政権は〕曾<sup>なま</sup>たま賊を討つを以て興師（舉兵）し、救援するを以て義を奮い、我が中國の天を共にせざるの賊を逐い、我が先帝（崇禎帝）の瞑目せざるの仇に報じ、恥を雪ぎ<sup>そそ</sup>凶を除き、高く千古に出る有るは、大清の如き者あるか。京闕（『織言』は「宮闕」に作る）を肅清し、山陵を修治し、先帝の地下の英魂を安んじ、臣子の域中（國中）の哀痛を慰めること有るは、大清の如き者あるか。我が累朝（『織言』は「我」字なし）の陵寢を護持し、我が十廟の宗祧（宗廟）を（『織言』は「我」字なし）修復し、其の諸藩を優錫（厚く賞賜する）し、其の殘黎（殘された民衆）（『織言』は「黎庶」に作る）を安戢（安撫）し、其の遺臣を擢用（選拔任用）し、其の舊政を舉行し、恩深く誼<sup>②</sup>崇し、義盡し仁の至ること有るは、大清の如き者あるか。權奸（權力を握った奸臣）當國（國事を壟斷する）し、大柄（政治の大權）旁落（衰落）す。初め魏公韓（『魏公翰』のことか）を遣りるも詞を奉ぜず、繼いで陳洪範を遣るも報命（復命）せず。然る後に興師して問罪するも、猶お且つ頓兵して進まず、淮・泗に紆回（うろうろする）して以て一介（ひとりの使者）の來るを待つ、古より未だ仁を以てし禮を以て（『織言』は「未有王師以仁以禮」に作る）、雍容（鷹揚で）として揖讓（面会する礼）すること大清の如き者有らざるなり。「助信佐順」（信〔なるもの〕なるものを助け、順〔なるもの〕なるものを<sup>たす</sup>③）、「天與人歸（天と人と歸す）」<sup>④</sup>せば、〔清政権の軍が〕大江を渡りて風伯（風神）の效靈（靈驗を現す）あり、金陵に入りて天日開朗（天氣晴朗）なり、千軍萬馬（多数の兵馬：『織言』は「千兵萬馬」に作る）寂然として聲無し（ひっそりとして声もなかった）、童叟（子供と老人：『織言』は「兒童」に作る）聚觀（集まって見学する）、朝市（朝市：人々の暮らし）變ぜず、三代（夏・殷・周）の師、是に於いて之を見る。靖南（靖南伯：黃得功）



覆没(滅ぼす)され、誰か一旅の師と爲らん。故主(福王弘光帝) 來歸(歸順)すれば、三恪を崇ぶの禮(周は、舜と夏・殷の後を封じて「三恪」と呼んだ)を彌(補足)す。凡そ我が藩鎮・督撫、誰が忠臣に非ざらん、誰が孝子に非ざらん(『織言』は「誰非忠臣、誰非孝子」を「誰非忠臣孝子」に作る)。天命の歸すること有るを識り、大事の已に去るを知る、投誠(歸附) 歸命(歸順)して、億萬の生靈を保全す、此れ仁人志士<sup>⑤</sup>の爲す所なり、大丈夫<sup>⑥</sup>以て自から決す可きなり。之を三思(再三思考)するを幸いとし、之を早く圖るを幸いとせよ。「予を信ならずと謂えば、<sup>きょうじつ</sup>皞日の如き有らん」(『詩經』王風・大車<sup>⑦</sup>)。順治二年五月(『織言』は「順治二年五月」なし)、南京の文武諸臣の趙之龍・朱國弼・劉良佐・王鐸・蔡奕琛・錢謙益・梁雲構・李喬・朱之臣・李沾・唐世濟・鄒之麟など謹しみて白<sup>もう</sup>す(『甲乙事案』巻下・「乙巳(二十四日)、劉良佐以帝至南京」条附録)。

①『隋書』卷三十八・列傳第三・「皇甫績」傳に隋が南朝の陳を滅ぼさなければならない三つの理由として挙げた中に「以有道伐無道、二也」とある。

②『織言』は「禮崇」に作る。『三國志』呉主傳に「德盛者禮崇」という用例があり、「篤い礼遇が加えられる」意味で用いられる。

③『易經』繫辭傳上：子曰。祐者助也。天之所助者順也。人之所助者信也。履信思乎順。又以尚賢也。是以自天祐之。吉无不利也(子曰く、祐とは助なり。天の助くる所は順なり。人の助くる所は信なり。信を履み順を思い、又た以て賢を尚ぶなり。是を以て天より之を祐く。吉にして利あらざるなきなり。)

④『孟子』萬章上に「萬章曰、堯以天下與舜、有諸。孟子曰、否、天子不能以天下與人。然則舜有天下也。孰與之。曰。天與之(萬章 曰く、堯は天下を以て舜に與う、諸有りや、と。孟子 曰く、否、天子は天下を以て人に與うること能わず、と。然らば則ち舜の天下を有<sup>あた</sup>つや、孰か之を與う、と。曰く、天 之を與う、と)」。

⑤『論語』衛靈公に「子曰。志士仁人。無求生以害仁。有殺身以成仁(子曰く、志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り)」

⑥『孟子』滕文公下に「居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行其道。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫(天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行なう。志を得れば、民と之に由<sup>よ</sup>り、志を得ざれば、獨り其の道を行なう。富貴も淫(かき乱す)する能わず。貧賤も移す能わず。威武も屈する能わず。此れを之れ大丈夫と謂う)」。

⑦『詩經』王風・大車に「謂予不信、有如皞日(予を信ならずと謂えば、<sup>きょうじつ</sup>皞日の如き有らん：私のことばを偽りだと思うであろうか、私の言の信なることは太陽のごとくである：私の心は白く輝く日のように偽りはない)」。

遼・金・元より以來、北方の砂漠地域から入って中国に主<sup>あるじ</sup>となった者は、「有道を以て無道を伐つ」(『隋書』皇甫績傳)といっても、友好関係を破棄して仇となり、相手の罪を責めて軍を動かさないことはなかった。ところが賊を討伐するために軍隊を起こし、救援するために義を奮い、わが中国の天を共にしない賊を追い払い、わが先帝(崇禎帝)の瞑目できなかつた仇に

報復し、恥を雪ぎ凶悪な人物を除き去って、高く千古にとどろかせることがあったのは、これまで清政権のようなものがあっただろうか。宮殿をきれいにし、陵墓を整備し、明朝の帝王の英魂を安んじ、臣下の者たちの国中の哀しみ痛む気持ちを慰めたのは、これまで清政権のようなものがあっただろうか。明の歴代の陵墓を保全し、歴代の宗廟を修復し、諸藩を優遇し、取り残された民衆を安んじて慰撫し、明朝の官員を抜擢して任用し、もともとの政策を踏襲し、恩義が厚く篤い礼遇を加え、義や仁のかぎりを尽くすことができたのは、これまで清政権のようなものがあっただろうか。奸臣が国政をつかさどり、その決定権が奸臣の手に帰し、はじめは魏公韓を清政権に対して派遣してきたが、清政権の詔を奉ることはしなかった、続いて陳洪範を派遣してきたが、清政権との交渉内容を帰朝報告しなかった。そうして、罪状を指摘して軍隊を起こしたが、軍を留めて進軍せず、淮・泗付近でうろうろとして、福王政権からの使者が来るのを待っていた。古来、仁や礼をもって悠然と会いまみえる礼儀を守ったものに大清のようなものはいなかった。助信佐順（誠実なもの（信）を人が助け、天道に従うもの（順）を天が<sup>たす</sup>佐ける）、「天與人歸（天意も人心もそちらにつく）」のであるから、長江を渡るのに風伯（風神）は靈驗を現し、南京に入城すると天気晴朗であった。多数の軍勢は、ひっそりとして声もなかった（軍規が整っていた）。子供や年寄は集まって見物し、人々の暮らしには変化がなかった。三代（夏・殷・周）の軍隊をここに見るようである。靖南伯の黃得功は滅ぼされ、誰が一軍を率いるものとなるだろうか。南京を逃げ出した故主（福王弘光帝）も投降し、周が三恪を崇んだ禮（周は、舜と夏と滅ぼした殷の後を封じて「三恪」と呼んだ）に南明の故主（福王弘光帝）を崇ぶという禮を加えて補足した。すべてわれわれ明朝の藩鎮・督撫は、誰もが忠臣であり、孝子である。天命の行きつく先を知り、大事が南明政権から去ったことを理解し、帰順・投降して、億萬の人たちの生命を保全すべきである。これこそ、『論語』でいう「仁人・志士」の爲す所である。大丈夫自身で決めるべきことである。再三考え、早く決めることができるのを幸いとすべきである。『詩經』王風・大車にある「予を信ならずと謂えば、<sup>きょうじつ</sup>曠日の如き有らん」（私のことばを偽りだと思うであろうか、私の言の信なることは太陽のごとくである：私の心は白く輝く日のように偽りはない）」である。順治二年五月、南京の文武諸臣の趙之龍・朱國弼・劉良佐・王鐸・蔡奕琛・錢謙益・梁雲構・李喬・朱之臣・李沾・唐世濟・鄒之麟など謹んで述べる、という。

天命が明政権を去っていき、清政権に移ったことを悟り、投降帰順して、人々の生命を保全すべきである。それこそが仁人・志士の行いである、というのである。

なお、この告示以外にも錢謙益はあちこちに書簡を送っていたようだ。江蘇武進の薛栄は、錢謙益が郷里の人たちに送った書簡にふれ、錢謙益をつぎのように批判する。

生世の不幸は、甲申（崇禎十七年／順治元年：1644年）・乙酉（順治二年：1645年）に〔北京・南京の〕兩都 相い繼ぎて淪沒するなり。在廷の諸君を論ずる母く、斷<sup>①</sup> 宜しく斷脰（斷頭）し以て我が太祖高皇帝の靈に謝すべし。即ち我らが輩の曾て祿を本朝に食む者は、

亦た宜しく朱氏の廢立を以て吾身の生死を決すべし。賊臣の錢謙益・蔡奕琛・趙之龍の輩の甘心もて□（一字空格）に媚びて相と爲り・將と爲るが如きを奈何せん。[しかしながら]馮道<sup>②</sup>・褚淵<sup>③</sup> [の輩の] 何ぞ其れ夥しきや。[錢] 謙益 又た書を里門（郷里）に貽る。[その] 情詞 閃爍（ちぐはぐである）たり。意は若し吳民を以て降れば、則ち游説の功に居り、降らざれば、又た倡義（義をかかげて舉兵する）の舉に附す、と。蓋し此の老（錢謙益）の積猾（一貫して奸猾不逞である）已に久し。故に轉面（短時間）に呈身（自己を売り込む）すること、影響（影やこだま）より捷（迅速）なり。權 高 [弘圖]・姜 [曰廣] に在れば、則ち高 [弘圖]・姜 [曰廣] に媚び、馬 [士英]・阮 [大鍼] に在れば、則ち馬 [士英]・阮 [大鍼] に媚ぶ、勢は [清政權の] 豫王に在れば、則ち [清政權の] 豫王に附す。倘し異時に勢 節鍼（権力者）に在れば、又た節鍼に附せん。此の輩は、蛆の糞に集まり、蟻の糞<sup>なまぐさ</sup>を吮<sup>すす</sup>るなり、亦た奚ぞ惜しむに足らんや・・・（『薛諧孟筆記』上册・四十葉・「[順治二年] 六月三日記」条）。

①「斷宜斷脰」の最初の「斷」字は衍字かもしれない。

②馮道は、瀛州景城人（河北獻縣）の人。字は可道，諡は文懿。後唐・後晉・遼・後漢・後周に次々と仕えたため、後世その節操について批判される。

③褚淵，字は彥回，諡は文簡。河南陽翟の人。南朝宋の文帝の南郡獻公主の駙馬となる。南朝宋の権力の中枢にいたが、蕭道成<sup>マ</sup>の南朝宋篡奪に加担する。その結果，南朝齊の功臣として南康郡公に封ぜられる。

この世での不幸は、甲申（崇禎十七年／順治元年：1644年）と乙酉（順治二年：1645年）に北京・南京のふたつの都が続いて陥落したことである。朝廷の人たちを論ずるなく、頭を斷って太祖高皇帝にお詫びすべきである。さらにかつて明政權の祿を食んでいた我々は、皇帝の廢立でもって自分の生死を決めるべきである。賊臣の錢謙益・蔡奕琛・趙之龍などの輩が自分から進んで清政權に媚びて宰相や將軍となったのをどうすべきだろうか。しかしながら、馮道や褚淵などの人物のなんと多いことか。錢謙益が書簡を郷里に送ったが、その内容がちぐはぐなものであった。その意味する所は、「もしも呉の人たちを伴って投降すれば、弁舌家としての功績となる。投降しないのならば、義をかかげて舉兵したことになる」という。この錢謙益は一貫して狡猾であった。したがって、短時間で自己を売り込むことは、影響（影やこだま）より捷（迅速）であった。権力が高弘圖・姜曰廣にあれば、高弘圖・姜曰廣に媚びる。馬士英・阮大鍼にあれば、馬士英・阮大鍼に媚びる。勢いが清政權の豫王にあれば、豫王に近づく。もしも、別の時に勢いが別の実力者に移れば、その実力者に近づく。こうした輩は、蛆が糞に集まり、蟻が生臭ものをすす<sup>マ</sup>るようなものである。惜しむに値しないのである、という。

さて、『吳城日記』は、「是（二十六日）の晩，長洲縣知縣的李碩<sup>ママ</sup>（李實）も亦た官を棄てて去る」と記すが、文秉の『甲乙事案』では、順治二年六月二十六日，安撫の黃家鼎が蘇州に到着すると，明の時に巡撫となっていた霍達（本稿（1）注7参照）・知府の陳師泰（本稿（3）注4参照）・同知の文王輔・推官の萬適・長洲縣知の李實・吳縣知縣の吳夢白などは，みな逃

げ出したといい、つぎのように補足する。

〔順治二年六月〕丁未（二十六日）、安撫の黄家鼎 蘇州に至る。〔明の〕巡撫の霍達・知府の陳師泰・同知の文王輔・推官の萬適<sup>①</sup>・長洲縣知の李實・吳縣知縣の吳夢白<sup>など</sup>等皆な逃る。霍達 北兵の江を渡る後に任に到り、舟を河干（河岸）に泊め、入城せず。六門を大開し、婦女を縦<sup>はな</sup>ち出避せしむ。錢謙益 既に清に投誠し、江南を招降するを以て己が任と爲す。書を督撫及び郷紳の輩に致し降るを勸む。「名正言順」・「天與人歸」等の語有り。門下の客の周荃に屬（いいつける）して〔黄〕家鼎と安撫<sup>あ</sup>に充て蘇〔州〕に來らしむ。時に官府 皆な遁れ、士大夫 争いて山に入る。〔黄〕家鼎等 入城し、民 皆な香を執りて以て迎う。城中の大姓も亦た香案を門に設くる者有り（『甲乙事案』卷下・「順治二年六月丁未（二十六日）」条）。

①江西南昌の人。乾隆十六年『南昌縣志』（卷第二十二・選舉・明・科第中・三十八葉と四十一葉）によれば、天啓七年（一六二七）の舉人で、崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百四名の進士。

巡撫となっていた霍達は、清朝の軍が長江を涉ってから蘇州に到着し、舟を河岸に停めたままで、入城しなかった。ただ、蘇州の六つの城門を開いて、婦女を避難させるようにした。錢謙益は、清政權に投降し、江南地域を降伏させることを自分の任務とした。そこで、書簡をそれぞれの地域の督撫や郷紳に送り、投降することを勧めた。その書簡に「名正言順」・「天與人歸」などの言葉があった。また、門下の客分の周荃にいづけて、黄家鼎と安撫の役に任じて蘇州に來させた。この時、役人たちはみんな逃げ出し、士大夫たちは争って山に隠れた。黄家鼎などが蘇州城に入り、人々は香を持ち出して出迎えた。城内の名家でも香台を門前に設置するところもあった、という。

なお、『嘉定屠城紀略』（『嘉定縣乙酉紀事』・『東塘日劄』）やこの『甲乙事案』で周荃を錢謙益の「門下の客」とするが、いまのところ、二人の関係はよくわからない。

二十六日の晩に逃げ出した長洲知縣の李實は、字が如石、号が鏡庵、四川遂寧縣の人である。丙子科（崇禎九年：一六三六）の舉人、崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百三十三名の進士。『啓禎記聞錄』に、「崇禎十七年・・・長洲縣令の李碩<sup>マ</sup>（實） 四月十三日に上任す。縣令を缺くこと一年有半なり」（『啓禎記聞錄』卷三・六葉）とあることからすると、崇禎十七年四月十三日、福王政權成立直前の蘇州に赴任してきた。

乾隆十二年『遂寧縣志（八卷首一卷）』（卷五・人物・明・「李實」条・十六葉～十八葉：乾隆五十二年『遂寧縣志（十二卷首一卷）』卷七・人物上・明・「李實」条・五十葉～五十三葉も同文。ただし、李實傳の末に「邑人張鵬●（一字不明）撰」とある）には、長洲知縣時代のことをつぎのように紹介する。

癸未（崇禎十六年）に進士と成り、長洲令に選ぜらる。長洲は繁難 天下の最爲<sup>た</sup>り。公（李實） 單車もて過<sup>すみや</sup>かに赴く。虚聲に驚まず、晨に出で夜に入る。日々程約（定めたきまり）にしたがって管理する）有り。刑獄（刑罰）は、意を求生（生計を立てられること）に立

つ。數月ならずして名に循<sup>したが</sup>いて大いに著わる。撫軍（巡撫）の張公（張鳳翔）任に抵る。各屬吏 見えるに、即ち長洲令を問う。公（李實）出づ。張〔鳳翔〕曰く、吾 江上に在りて已に長洲の名を聞く。今、吳道府に到り、紳衿（土地の有力知識人）・氓庶（人々）

間言（不満のことば）無し。是れ何れの調停の法を用いんや、と。公（李實）曰く、知縣は調停の法を用いず。若し調停を用うれば、即ち調停の到らざる處有り、と。撫軍（巡撫）〔の張鳳翔〕善しと稱す。久之（久しくして）、時の吳縣令（吳夢白）の丰采（人柄）

公（李實）の右に出づ。長洲の劉學博 兩令を以て之を徐勿齋（徐汧：字は九一、号は勿齋。江蘇長洲の人。萬曆二十五年（一五九七）～弘光元年（順治二年：一六四五）。崇禎元年戊辰科（一六二八）三甲一百四十二名の進士）に質す。勿齋（徐汧）素より人倫（人物評価）の鑒（鑑識眼）有り。曰く、長洲は鏡の如し、吳縣は珠の如し。劉〔學博〕未だ達せず。〔そこで続けて〕曰く、珠は善く盤を滾（ころが）り、終に邊に滾（ころが）り滯（とどま）るを恐る。鏡は越いよ磨けば越いよ亮らかなり、と。今人に至るまで猶お之を稱す。乙酉（順治二年）夏、官を去り郷を卜して上清江に之き焉<sup>①</sup>に居る。是の秋、〔李實の息子の〕少司農（總督倉場侍郎）の〔李〕仙根（順治十八年辛丑科（一六六一）一甲二名の進士）其の〔李實の〕母を奉じて蜀より至る。則ち公（李實）已に辭榮（辭職）して高蹈（隱居）すれば、少司農（李仙根）の至るを喜び、傾囊（あるものをすべて出す）して之に授けて曰く、吾が宦物は是の如し。此の後の活計は惟だ汝なるのみ、と。之を検するに止だ二百餘金のみ。少司農（李仙根）慮りて曰く、家累（家族）六百指（六人）なり。此れ奚ぞ以て濟らん、と。公（李實）笑いて曰く、吾 已に古の「一錢を受け、一石を載す」を媿ずる者なり。比（以前）、吾 離任するの時、庫金（庫藏の金帛）九萬零を積む。吏役に妄りに竊むこと母れと戒しむ。今、竊むこと多き者は死し、竊むこと少なき者は刑せらる。吾をして一に或いは慎まざらしめば、今 安んぞ復た汝等に見ゆるを得んや、と（乾隆十二年『遂寧縣志（八卷首一卷）』卷五・人物・明・「李實」条・十六葉～十八葉：乾隆五十二年『遂寧縣志（十二卷首一卷）』卷七・人物上・明・「李實」条・五十葉～五十三葉も同文。ただし、李實傳の末に「邑人張鵬●（一字不明）撰」とある）。

①大姚浦は府の東南三十八里に在り。長洲縣に屬す。吳淞江 麗山湖より流れて此に至る。又た東北に流れ折れて三江と爲る。俗 上清・中清・下清江と名づく。又た東して崑山縣の界に入る・・・（同治『蘇州府志』卷第八・水・「大姚浦」条・二十二葉）。

崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百三十三名の進士となり、江蘇長洲知縣に任ぜられる。長洲は、難治であることは、天下の最たるものであった。李實は、質素な出で立ちですみやかに赴任した。虚勢を畏れず、出晨入夜（官舎を朝早く出て、夜になって帰ってきた）。日々きまっていた。刑罰は、更生の立場から行った。そらして、数か月もせずに、名声にしたがっておいに知られるようになった。巡撫の張鳳翔（崇禎十七年（順治元年）十一月二十三日に任命：本稿（1）注6参照）が、弘光元年（順治二年）二月十三日に蘇州にやってくる。各官員が拝



謁したところ、長洲知縣はどこかとたずねた。李實が出ると、張鳳翔は、「私は赴任の途上で、すでに長洲知縣の評判を聞いていた。いま、蘇州の役所に到着して、[李實の評判を聞くと]土地の有力知識人や人々はすぐれた評判に異議を唱える者がいなかった。これは、どのような方策をとったのか」という。李實は、「知縣は方策をとっておりません。もしも方策をとれば、いたらないところが出てまいります」という。巡撫の張鳳翔は、「すばらしい」と称したという。久しくして、吳縣知縣の吳夢白の人柄が、李實に並ぶようになった。長洲の劉學博は、二人の知縣のことを徐汧に質問した。徐汧は、もともと人物評価の鑑識眼を持っていた。徐汧は「長洲知縣（李實）は鏡のようであり、吳縣知縣（吳夢白）は珠のようである」という。劉學博は、よく分からなかった。そこで、徐汧は続けて「珠は盤上をころがり、とどまること（やりすぎ）を心配する。鏡は、磨けば磨くほどはっきりする（徹底的に行なう）ものである」という。この評価の言葉は、今に至るまで、称されている。そして、乙酉（順治二年）夏、辞職して、上清江に行き、そこに居を定めた。この年の秋に李實の息子の李仙根が、李實の母を伴って蜀よりやってきた。李實は、すでに辞職して隠居していたので、李仙根の到着を喜び、財産すべてを出して、それを李仙根に渡して、「私の官僚として得た財産は、これだけだ。これからの生計は、李仙根に頼るしかない」という。財産を計算すると、ただ二百金あまりであった。息子の李仙根は心配して、「家族は六人です。これでどうしてやってゆけるのですか」という。李實は笑って、「私は『一錢を受けて、一石を載せる』ということを恥じるものである。前に私が長洲縣知縣の職を離れた時、金庫には九萬ほどあった。書吏には、分別なく着服しないようにと戒めた。いま振り返ってみると、多く着服したものは亡くなり、少し着服したものは処罰された。私がひたすら慎まなければ、いまどうしてお前たちに出会うことができたであろうか」といった、という。

諛墓の辭がかなり含まれるかもしれないが、李實は高潔清廉な人物であったと伝える。

また、康熙『蘇州府志』も、つぎのように伝える。

李實、字は如石、四川遂寧の人なり。崇禎癸未の進士（崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百三十三名の進士）。[崇禎]十七年 [長洲縣知縣に] 任ぜらる。賦性（品性）敦朴にして、一に至誠を以て人に待す。吏民 亦た敢て欺く者無し。初めて縣に蒞<sup>のぞ</sup>み、比較（官吏の行った徴税実績を引き合わせる [の不正]）に遇えば、泣き下りて曰く、彼は父母の體膚に非ずや、何の故に刑を受けて朴（むちうち）されん、と。善言を以て勸輸（勸めて納税させる）し、而して責を加えず。國課（國賦）亦た未だ嘗て缺けず。浙に某生有りて疏言するに「洞庭・太湖の西山 煤（石炭）を産すれば、宐（宜）しく廠を開くべし。太湖の漁舟 宐（宜）しく徴税すべし。[そうすれば] 歳ごとに十萬を得可し」と。因りて中官（宦官）を遣りて、來り勘（調査）す。[李] 實 曰く、「洞庭太湖は吾が境に非ずと雖も、然れども吳の民の害と爲ること大なり」と。遂に毅然として往きて中官（宦官）に謁して曰く、「西山は金陵の後脉なれば、祖陵を傷つけるを恐る。[廠を] 開く可からず。

太湖は、盜藪（強盜が聚集する場所）なり。若し漁税を征すれば、是れ之が變を激しくするなり」と。中官（宦官） 懼れ、其の事 寝むを得・・・（康熙『蘇州府志』卷第四十八・宦蹟三・長洲縣・明・「李實」条・二十九葉～三十葉）。

李實、字は如石、四川遂寧の人である。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百三十三名の進士で、崇禎十七年に長洲縣知縣に任ぜられた。人となりは、篤実で飾り気がなく、ひたすらまごころで人に接した。そのため、吏や民もあえて欺こうとはしなかった。はじめて、長洲縣知縣に着任すると、比較（徵税調査）の不正に遇えば、泣いて、「お前たちは父母の官（知縣）の皮膚にあたるものではないのか。どうしたわけで処罰されて、むち打ちされるのか」といって、やさしいことばで勧めて着服分を納税させ、処分を加えなかった。このような寛大な処置をとったけれども、賦税は欠損しなかった。浙江の某人が「洞庭・太湖の西山は石炭を産出するので、鉦廠を開設すべきです。また、太湖の漁舟からも徵税すべきです。そうすれば、年間十萬の利益を得られます」と上疏した。そこで、宦官が派遣され調査が行われた。李實は、「太湖は、長洲縣と境を接してはいないけれども、蘇州の人たちにたいへんな害を与える」といい、こうしてきっぱりと宦官のところに行き面会して、「太湖の西山は、金陵にある太祖の御陵の後脉にあたります。鉦山を開けば、その後脉を傷つけてしまわないかと心配しますので、鉦山を開くべきではないと思います。太湖は、強盜が聚集する場所です。もしも、そこから漁税を徵收すれば、叛乱がはげしくなります」と述べた。宦官は、それを聞き恐れて、鉦山と漁税とは沙汰やみとなった、という。

恩情をもって職務にあたり、人々もそれに背こうとはしなかった。また、太湖や西山の人たちも守ったというのである。

李實は、晩年には蘇州城内の南東の葑門近くにある雙塔（今の定慧寺巷あたり）に移り、七十八歳で亡くなる（乾隆十二年『遂寧縣志（八卷首一卷）』（卷五・人物・明・「李實」条・十八葉）による）。

吳縣知縣の吳夢白は、浙江石門（崇德）の人、仁和の籍。丙子科（崇禎九年）の舉人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百三十六名の進士（光緒『石門縣志』（卷七・選舉志・科目表・十九葉～二十葉）による。『啓禎記聞錄』によると、吳夢白は吳縣知縣として崇禎十七年四月二十五日に着任したという。

吳邑の新令の吳夢白、字は可黃、崇德人なり。〔崇禎十七年〕四月二十五日に〔吳縣知縣として〕上任す。正に凶問の驚傳し、時事 測る莫しの際に値り、但だ多憂多懼を見るのみにして、居官の榮（知縣としての威嚴）を見ず。未だ向後（以後）の何如なるかを知らず（『啓禎記聞錄』卷三・七葉）。

吳縣の知縣の吳夢白は、浙江石門（崇德）の人、仁和の籍である。崇禎十七年四月二十五日に吳縣知縣として赴任してきた。ちょうど北京の崇禎帝の訃報が驚きとともに伝わり、状況が渾沌とした時にあたって、なにもせず非常に憂えて非常に心配するだけで、知縣としての威嚴

がなかった。また、これからがどうなるかも分からなかった、という。

（つづく）

訂正)

「撫・按」は、『啓禎記聞録』巻五・「順治二年五月二十六日」条では「安撫」に作る。本稿（1）のp118では、この条の「撫・按」を「巡撫と按察司」とし、「撫・按は仍お回りて虎丘に寓す（巡撫（霍達）と按察司（周元泰）なお虎丘に舞い戻ってきた）」と考えたが、文脈からすると、「安撫の黃家鼎が虎丘に戻った」としたほうがよいかと思う。

したがって、本稿（1）のp118の下線部を削除してください。

ただ、『吳城日記』の「五月二十六日」条によると、黃家鼎が虎丘に到着した翌晩には李實は官を棄てて去ってしまうが、巡撫（霍達）と按察司（周元泰）とは、戻ってきて虎丘に滞在していたという。

是の晩（五月二十六日）、長洲縣知縣の李碩（李實）は亦た官を棄てて去る。撫・按は仍お回りて虎丘に寓す（『吳城日記』巻上・「乙酉（順治二年）五月二十六日」条・二〇六頁）。

そして、『明季南略』によれば、五月二十七日には、郡（蘇州）に復歸したという。

〔五月二十七日〕・・・黃家鼎 蘇州に至る。撫臣（巡撫）の霍達 復た郡（蘇州）に歸る（『明季南略』巻之四・「二十七戊辰」条）。